日本産業映画・ビデオコンクール奨励賞　　優秀映像教材選奨優秀賞

心とからだを開く看護音楽療法

～パーキンソン病を生きる人びとと～

VHS 26分

頒布価格
20,000円
（消費税・送料別）

推薦の言葉

聖路加国際病院理事長（全日本音楽療法連盟会長）
日野原　重明

このたび、東京シネ・ビデオ株式会社から川島みどり所長（健和会臨床看護学研究所長）の監修で「看護音楽療法」と題したビデオが完成した。音楽が、種々の病いをもつ患者の癒しに用いられて効果を生むことは、アメリカその他の欧米では50年前から実証され、これを専門に扱う音楽療法士が認定されている。日本でも過去20年前から医療や看護の現場や福祉の施設で音楽療法が急速に展開され、私が会長をしている全日本音楽療法連盟では、音楽療法士の資格認定を行っている。

脳の錐体外路系の疾患とされるパルキンソン患者にこのビデオを使って、音楽療法が行えるのである。つまり音楽療法前に、筋肉の過度の緊張をなごめる操作を行った上で、ピアノのリズミカルな音楽を奏し、またトランポリンの上で跳ね上がる動作を繰り返すと、硬直した筋肉がほぐされ、顔にも表情が出、手足の運動がリズミカルになり、患者と看護師とのコミュニケーションはいよいよ密になり、患者のQOL（いのちの質）が高まる。この不思議と思える現象がこのビデオには分かり易く解説されている。このような視聴覚教材教育が広く看護や介護に活用されることを期待する。

監修：健和会臨床看護学研究所長　川島みどり

対象：看護師、保健師、看護学生、理学・作業療法士、介護福祉士、ホームヘルパー等をはじめ、デイサービス・デイケアの関係者

企画　**健和会臨床看護学研究所**
〒120-0022 東京都足立区柳原 1-27-5
TEL 03-5813-7395　FAX 03-5813-7396

制作　**東京シネ・ビデオ株式会社**
〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-8-8
TEL 03-3242-3151　FAX 03-3242-3182
http://www.tokyocine-video.co.jp/

監修の言葉

人々の心やからだにはたらきかける音楽を治療の手段として用いてきた歴史は古く、最近看護の領域でも手術患者さんや末期の緩和ケアの手段として、また福祉の領域では痴呆ケアの一方法として音楽を取り入れた実践報告が聞かれるようになりました。

このビデオは、ピアノが創り出すメロディとリズム空間のなかで、伝統的な看護ケアと新しいケアリングを組み合わせたセッションの紹介です。

パーキンソン病という国の特定疾患に指定された難病の診断を受け、日々病とともに生き、日常生活上の不自由や不具合がある方々とともに、5年余にわたる実践のなかで得たものは、たとえ、病気そのものの回復が困難であり、病状の進行が避けられなくとも、前向きにパワフルに生きていくことが可能であるということです。

あらゆる方法を使いながら、楽しく心地よい状況を生み出すことで固縮した身体がゆるみ、心もからだも開かれていく様子は、回を重ねてもなお新鮮で感動的です。映像は、癒す者、癒される者双方が共通の音楽を聴きながら心身ともに解放された状況下で、これまでとは全く異質の人間関係が生まれることを物語っていると思います。看護学教育の場で、臨床で、そして高齢者、障害者福祉の現場での活用を期待します。

内容

○ここは東京下町にある小さな診療所のデイサービス室。
今日も、そこからさわやかなピアノの演奏が聞こえてくる。月2回、土曜日の午後に行われている看護音楽療法のメロディである。
1996年にスタートした看護音楽療法は、パーキンソン病を患って生きる人々を対象に前向きに生きていただくことを目的におこなわれている、これまでの音楽療法に看護の視点を取り入れた新しい療法である。

○パーキンソン病は、我が国の神経難病の一つにも指定されている疾患で、体や心の動きを作用する神経伝達物質のドーパミンの産出が阻害されるために、歩行が不自由になったり、手足がふるえたり、全身の筋肉が固縮するなど、日常生活を送る上での行動にさまざまな弊害が現われる。そのため、病気を患っている人の中には、生活への意欲を失って家の中に閉じこもりがちになったり、それが原因で寝たきりになる人も少なくない。しかし、高齢化の進展とともにその罹患率は非常に高いにもかかわらず、医療による治療法が充分に確率されていないだけではなく、リハビリテーションの方法も開発されていないのが現状である。

○看護音楽療法は病気そのものを治療するのではない。看護師たちの温かいケアとピアノのさわやかなメロディ、そしてトランポリンを取り入れた全身運動により、心とからだを、楽しく、心地よく開いていくことで、患者さん自身のセルフ能力を維持・向上させ、それによってその人らしい生活の確立とQOLの向上をめざしている。

○ここに通ってきている人々は、月2回行われるセッションに参加するために、家族やホームヘルパーに付き添われて、雨の日も、寒い風の強い日にも、何時間もかけて電車を乗り継ぎ、重い足をひきづり、ひきづりやってくる。
そして、1人約30分のセッションを終えた後、しばらくみんなで合唱したり、雑談を楽しんだりした後帰って行くが、その時の足取りは、不思議なほどみな軽くなっている。
軽くなるのは足だけではなく、体全体が…そして表情も…来たときとはうって変わって、明るく、おだやかな表情になって帰っていく。

○看護音楽療法の対象はパーキンソン病の患者さんたちであるが、それを支えているのは看護の専門職である看護師たちと、音楽の演奏を行う演奏家たちである。
ここでは、いずれも全員がみなボランティアとして看護音楽療法に参加しているのである。
セッションのプログラムの内容は患者1人ひとりの看護計画に基づいて実践されている、看護師たちは常に人間的ケアの提供を基本に、彼らを見守り、賞賛と肯定、共感的理解で温かく受容する。
看護師たちの拍手や声かけ、声援による賞賛は、患者さんの心を解きほぐし、体を軽くする。ピアニストはそうした心やからだの動きを敏感に察知して、その人、その時どきにふさわしい選曲をし、身体の動きにあわせて演奏を行う。

○心とからだを開くことで活き活きと甦っていくパーキンソン病の患者さんたちの表情は、看護スタッフには、病院や診療所の日常の仕事では得ることのできにくい看護の本質に迫る人間としての喜びの得られる貴重な時間になっている。そしてこうした体験を得る中で、看護スタッフたちは感受性や共感性、直感力、創造力を高め、看護技術を磨いていく。

○看護音楽療法は本人や周りのスタッフだけではなく、介護する家族へも、大きな励ましと明日への希望を与えている。
パーキンソン病そのものは癒えなくても、病気を抱えつつ、前向きに、積極的に日々を生きる活力を生み出す療法、それが看護音楽療法である。
看護音楽療法は、充分に確立したものではなくまだ取り組み過程の最中であるが、土曜日の午後を楽しみに心まちしている患者さんや家族の熱い思いには、看護音楽療法に寄せる期待の大きさがうかがえる。

●平成8・9・10年度厚生省特定疾患に関するQOL研究（福原信義班長）　●平成9年度　大同生命厚生事業団　助成研究
●平成12年度　聖ルカライフサイエンス研究助成　●平成13年度社会福祉・医療事業団　長寿・子育て・障害者基金
の助成のもとに看護音楽療法はおこなわれています。

スタッフ
製作　横川　元彦
プロデューサー　宮崎　信恵
演出　山崎　定人
撮影　上村四四六
VE　岩佐　治彦
編集　大高　勲
制作主任　吉村　繁
解説　中村　啓子